
夕焼けが見える高台で出会った少女は

刹那

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼けが見える高台で出会った少女は

〔二十一〕

N4004Z

【作者名】

刹那

【おひさま】

俺は制服の色がちよつと変わった学園の一年生。いつも晴れた日にはお気に入りである高台に上り、夕焼けを見る」ことが日課になつていたりする。そんな9月を過ぎたあたりの頃、こつものよつに高台を登つっていくと、ん？？ 前方から転がつてくる少女が……？

1 フラグ的な出会い（前書き）

実際に恋愛小説を書くのは初めてですがどうか読んでいただきたいです。

ちょっと電波なところが乱入しますがそこはご了承ください。

1 フラグ的な出会い

ここから見る夕焼けはとっても綺麗で俺のお気に入りの場所でもある。

いや、違うな。俺達の、お気に入りの場所だ。

雲までもが赤く染まる光景がとても印象的で神秘的で……でも、それだけがここを気に入ってる理由じゃない。

俺とお前が初めて会った場所 だから。

世界を針で突ついたらかち割れるんじゃないかと思つくらい寒い冬が過ぎ、手で握り締めたらほんわかと綿飴みたいに崩れるような温かい春が過ぎ……。

そして、今や世界温暖化で問題になつてゐる猛暑が世界を焦がす夏がやってきた。地球の安否がとっても心配だ！ でも心配するだけで実際に行動したりしようとは毛ほども思つてない。

じめじめした梅雨を超え、本格的な暑さがここの中学校園にもやってきたわけだがおかげさまでこの県立中学校園の一郭はエアコン

ンすらも効かない緊急事態を迎えていた。

クラスのアホどもが教室で野球なんぞといつ屋外のスポーツを、もう一度言うが屋外でするスポーツを屋内でしゃがつて紙を何十にも重ねて丸めたボールを教科書を丸めて固めたバットが打ち、見事にエアコンにヒット！ 当たり所が悪く、エアコン様は逝っちゃった。

クラスのアホが悪いと担任に言われ、修理の日処が立つまではつとエアコン我慢生活である。

室内温度は38度… 濡度や何やらを含めて体感温度は40を越しているだろ？

額に浮かぶ汗や手の甲にすらも吹き出る汗がそれを物語つてるだろ？ 机の上には必ず必須となるタオルも今日の4時間目を迎えた今は使い物にならないほどにぐっしょりと濡れている。

アホか！ 教育委員会のアホ！ 職員のアホ！

こう言いたくなるのは分かるだろう？ 紙で丸めただけの衝撃で「愁傷様」しちまう安物のエアコンをよこすなよ教育委員会… それで修理しない職員もアホだ！

このクラスで授業をする教師も辛いんだからさつと直せよ… まあ、実際は教師の心配なんて全く！ してないけどな（笑）

黒板さんすらも汗かいてるんじゃないかな？ はあ……。

そんな無茶苦茶な4時間を過ごして、昼休み、飯を食い終え、またまた授業！

それを乗り越えやつとやつてきた地獄から地上に戻る階段であるホームルーム。担任の整った顔にもキラリと光る汗が… だらだら流れてる。

実際はどうだら×5くらいな？

即行でホームルームを終わらしてくれた担任に感謝し、かばんを持つて即行学校を後にした。

9月に入つたが実際には夏である。

一学期が始まつても夏つてのは神様のいたずらなんてレベルを超えて神様の八つ当たりだ！ もう涼しくなつてきても良いだろ？

ああ、秋だなつて教えて欲しい！

鈴虫よ鳴け！ セミよ静まれ！！

はやく秋来いよ。

なんて思いながら額に流れる汗を同じく汗で濡れた右手の甲で拭う。

向かつている先は俺のお気に入りの場所である。

田舎ではあるが街中からかなり高台に位置するこの学園は入り口から右と左に道が分かれている。右は茅ヶ崎方面で左が茜宮方面。俺が向かう先は左の茜宮方面だ。だが、すぐに地面に敷き詰められたコンクリートの道からはずれ急な坂道が続く芝生の上を歩いていく。

そう、この先には絶景ともいえるすばらしい町並みを見れる場所であり、絶好の夕焼けが見える高台に出る。

俺はそこに向かつて教科書の入つた重たいバックを持って歩いているのだ。

空は赤く染まり、ちよつとよく夕焼けが見える頃だらう。まあ、大抵夕焼けが見えた場合、明日か明後日に雨が降るから傘が近いうちに必要になるつと思つておけるわけで一石二鳥とも言える！ 早く見たいな！ そう心が騒いでる。

視界を高台の頂上に向かっていると転がつてくる白い髪の毛をした

女の子が転がってきた。

女の子が転がつてくるなんて珍しい…………つて。

えええ！？？ 女の子が転がつてくる！？！？

頭が混乱する。当たり前だ！ 普通ありえんだろ？！
反射的にかばんを放り出し、まっすぐ俺に向かつて転がつてくる
少女を受け止める。

勢いの乗った重みが体の心を駆け抜け、体が後ろに倒れそうになる。
ここで倒れると俺もろとも転げ落ちてしまう！ そう思い、必死に踏ん張り耐える。

「おー！… どうしたんだよ…」

声をかける。

少女は「ほー」と咳き込んだ後に強く瞑っていた目を見開いた。
瞬間に分かる……すげえ……かわいい。

整った顔をしている。ぱっちりと開いた目が俺の瞳をしつかりと
捕らえている。

俺が見とれている間に少女は俺に一言もかけずに俺の腕から離れ、
猛ダッシュで駆け上がっていく。

何事なんだよ？

絶対にただ「どじやないよな！？」俺は放り投げたかばんを拾い
上げてから高台の頂上に向かった。

到着した時には高台の中心で取つ組み合いでいる茶髪ボーネルの茜富学園の三年の女子学生とさつきの少女の姿があった。その一人のようすを見守るように黒髪の静かそうな同じく茜富学園の三年生の女子生徒の姿も若干離れたところにある。

西窗学園は色々と特殊な学校であつて制服の色が学年によつて変わる。

三年生が赤紫

一年生が赤

一年生が黒

と言つた具合だ。

白い髪をツインテールにしている少女と対峙しているのが三年だと分かったのもそこにある。

俺は赤色なので一年生だ。

そんなことは置いといてだ！！

俺はどうするべきか思案した。喧嘩を止めるべきか、はたまた無視すべきか。

関係の無い喧嘩に首を突っ込むのは嫌だからなあ……。

とか考えているうちに事態は動いていた。

三年生が放った膝蹴りがまともにツインテールの少女の腹を捕らえたのだ。そのまま腹を抱えたまま少女は倒れこむ。

その様子を見て三年は何か言いながら連れなんどう黒髪の静かそうな少女の元に向かつた。

そのまま俺に見向きもせずに高台を下つていく。俺はその二人から視線を外し、田の前で倒れている少女に駆け寄りしゃがみ込んだ。

「惜しかつたな。リベンジあるのみだ」

とか言つてみる。

少女はゆっくりと立ち上がりしゃがみ込んでいる俺を見下ろした。やはり整つた顔立ちをしている。強気な性格なんだらう、吊りあがつた目にすらっと伸びる眉毛、小さな唇に小柄な顔。

髪は世にも珍しい真つ白な……純白のツインテール。腰まで伸び

た髪房は先まで整つて伸びている。体はかなり小柄だ。中学生??いや、小学生に見えないことも無いがきっと違うだろ。

俺は立ち上がり逆に少女を見下ろした。

少女はしばらく俺と目を合わせていたがすっと目を離し、歩いてく。ちょっと体がふらついているのは危なつかしいが……。

その後姿を見送っていると少女は急に振り返ってきた。

「励ましてくれて……いや……なんでもないわ」

澄んだ声と言葉を残して高台を下つていった。

なんか……えらいフラグを張つてしまつた気がするが……氣のせいか? 考えすぎか?

いつも絡み合つた感情で夕焼けを見る気にはなれずにほほ沈みかけの夕焼けに背を向け、自分の家に向かつて高台を下つた。

次の日。

まあ、案の定曇天で雨が降るかなあつと思つたのだが天気予報では曇からは晴れると聞いたのでちょっと嬉しかつたような悲しいようだ。

晴れるといつことは太陽が顔を出すといつことだ! つまり夕焼けが見えるがその日差しは確実に地面を焦がす。つまりのつまりは熱くなる……またあの地獄が待つているといつことを表しているのだ。

朝から憂鬱な足を引きずつて学園に登校する。

学校に着き一年の校舎の廊下を歩いていると耳に入つてくる言葉

……。

『美少女の転校生がくる』

眩暈がしそうだ。

まさか本当にフラグが立つたんじゃないだろうな……。

教室に入ると正宗まさむねがこちらに向かつて大声を上げながら走つてきた。

「一真かずま！ 一真！ 怖いへんだあ！」

「なんだよ！ 次はなんだ？ 窓でも割つたか？ アホ

「ちげえよ！」

正宗はこの学校で仲良くなつた俺の友達だ。

彼女居ない歴れき＝年齢という俺と同じ経験の持ち主だが、こいつは
ちと特殊でな……。

まあ、簡単に言えば、たらし、だ。

これまた大層な女好きでクラス毎まいか学年全体が恐れ慄く正宗
様である。

「じゃあ、なんだ？」

ちなみにエアコンを壊したアホの一部にこいつも入つている。

「転校生が来るんだよー！ しかも美少女ーーー！」

「なんだ……そんなことか……」

一瞬でも焦つて損した……。

のそのせとまだ重たい足を引きずりて自分の席に行く。
そして気づいたこと。

「なんで、俺の横に机があるんだよ……」

俺の隣にはいつもはない机がある。
まあ、なんとなく見当はつくが……。

「俺も来て思ったよ。もしかしたら……な……」

「俺は期待なんてしないからな」

「なんでだよ！？」

正宗の気持ちが俺には分からないよ……。

隣に置かれたオーネーの机を見ながら自分の机にかばんをかける。
それと共に教室に響く声。

「かず――――――

「朝から元気だな」

走つて教室にやつってきたのは柊 菜摘ひいらぎ なつみ

新聞部副部長で一年生ながらも新聞部のエースとして学校に耳寄りな情報を提供してくれる。

さて……今回は……まあ……なんとなく察しがつくが……。

「耳寄りな情報を！」提供！―― 聞きたい？

「いや……べつ」「―――あきたいいいいいいい……」

俺の声を遮るようにクラス中の生徒が一気に叫んだ。
お前らどんだけ菜摘の情報を待ってるんだよ。洗脳でもされてる
んじゃないかな？

「ありがとうございます！……んじゃ、どびきりの情報を！……転校生はこのクラスに来ます！……」

「わあわあああ……！」

一気に歓声が上がる。

俺は違う意味でうわあああだよ……。

まだ決まったわけじゃないだろうが十中八九あの少女だろ？……。

キーンコーン……

チャイムが鳴り始め、手を振りながら自分のクラスに戻っていく
菜摘。

それと引き換えに教室に入つてくるのがTHEイケ面の花園先生である。さらさらの長髪にすらつとした鼻立ち。俺は今までこの人よりイケ面の顔を見た事が無い！

毎度ながら、花園先生の額には汗がキラリと光っている。

「おら！ 席に着け！ みんなに吉報があるぞー！」

そう言いながら黒板に白い文字でかでかと誰かの名前を書いた。
さかき ゆうひ
榎 夕緋

ゆうひ……？

変わったお名前だな……こんな田舎じや聞いたこと無い名前だ。

ああ……なんか色々と嫌な予感が頭に浮かぶよ……。

まず夕緋って名前が夕日と被つて腹立つんだよな……。

顔を俯け、できる限り関係ないような雰囲気を出しておこう……。

「転校生がきたぞ！ それじゃ、入つてくれ」

見たくは無いが……これは人間的な本能的行動だろう。ついで眼がそっちに行ってしまう。

入ってきたのは小柄でパツチリ開いた目と絶対に一度見た者の脳裏に焼きつかせるだろう純白のツインテール。

教卓の前に立たされた転校生はすっごく美少女だった。

絶世の美少女だった……。

モデルにでもなれるだろう。ちよつと体の小ささが目立つが……。

美少女だ。

昨日、ばったり出会った美少女だ。

喧嘩していた美少女だ。

脳裏に焼き付けられているツインテールがそれを証明しているだらう。ああ……ほんとにフラグ立っちゃったよ……。

こうして俺達はまた出会ってしまった。
頭に渦巻く不安と恐怖と悩みと期待？
もう……しらねえよ……。

神様……俺はここではつきりと思つたよ……。

‘運命’って言つのが本当に存在してゐてな。

To Be Continued

1 フラグ的な出会い（後書き）

ちょっと表現が変だつたりするでしょうか?
感想などよろしければ書いてください！

神の妹 紅恋の妹

美少女転校生の神 夕緋が来た事によつて俺の学校生活は大きく変化する事になる。

まず第一、休み時間になると、俺の隣の席に居る神のせいで休み時間中席に座つておく事が出来ない事。

第一に授業中にまだ神には教科書が届いていないため教科書を見せてやらなくてはいけない事。これが一番の問題だつたりする。

俺等の学園は隣の席同士がくつづいている。一般的な小学校の教室を思い出してもらえれば分かりやすい。だから簡単に教科書を見てやれるんだが……こつ……こいつは玳うも猫を被つているようでとつても清楚なお嬢様を気取つている。

そのため、教科書を見せるというだけで会話をする点が出来てしまい、そのたびに吐き氣をもよおす。ああ……ほんとについていいと思う。

なんだかんだで放課後です……。

滴り落ちる汗がもう冷や汗なのか熱さのせいなのかよく分からんが、もうとりあえず帰りたい。

朝の曇天がいつの間にか真っ青な空に一変していった事に気づいたのは放課後になつてからだった。

と、言つてもだ。

まだ夕焼けを見るにはいたさか早すぎる。今見に行つてもちよつと赤くなつてゐる程度で綺麗に見えるとはいえない。

その間、少し学園内をブラブラすることにしてみた。

一年校舎があるのは北校舎だ。そして俺達一年の教室は三階から四階まで。俺のクラスは三階だ。学園内全部で五階建てで北、西、東で分かれている。北校舎の西階段から下におりると一階にはちょうど食堂がある。そこで一服しようかと思い、足先を向けたわけだが……。

カツツ……つと革靴が鳴る音が背後で聞こえた。

今居るのは三階と一階の間の西階段。ここを通りるのは一年生と職員くらいなのだが、まあ、どちらにせよ誰かがいるのは間違いない。そう思つて振り返つた……が。

「だれもいねえ……」

自分でもびっくりしてゐる。

確かに足音は聞こえたのだ。なんだなんだ！ こんな夕暮れにお化け様の登場だつてのか？ 流石にそれは無いだろう。きつと俺の歩いた音が若干遅れて俺の耳に入つたんだ！ そう、思おう！

と、そう開き直りまた下に向かおうと振り向くと……。

「うわあ……！」

「え？」

あまりにも唐突過ぎた。

目の前に女子生徒が立つてゐたのだ。

制服が黒色のところから察するに一年生のようだが、上腕辺りにまかれた文字入りの布が目に入った。

『風紀委員』

それが表すのは言葉どおり、風紀委員に所属している事を示しているのだが……。

「大丈夫ですか……？」

「あ、ああ……悪い……」

「すいません……静かにしそぎてたみたいで」

「ああ！ 気にするな」

その一年生の女子生徒はぺこりと頭を下げた。

そこでふと、疑問に思つたというか興味を持つた。なににかつて？ いやいや、この女子生徒の髪の色だよ。

綺麗な純白な髪の毛じやないか……。腰までストレートに伸びている。顔を上げた女子生徒の顔はとても整つていてどこかだれかに似ている気がする。

誰だらうつか……んんん……芸能人の誰かだらうか？

「あの……私の顔がどうかしました？」

「あ、いや！ なんでもない。すまなかつたな」

そういうて俺は歩き出して女子生徒とすれ違つた。

しかし……ほんとに誰だらうな……。髪の毛でぱっと浮かぶのは神だが……いやいや、神に似ているか……？ 似てなくも無い……けど……。

そんなことを思いながら一階から一階に上り下りる階段に差し掛かつたとき。

噂をすれば何とやら……田の前に真っ白なツインテールを揺らしながら上に上がつてくる神がいた。

「ひらひらふと、顔を上げるとちよつと不機嫌そうに俺を睨み、ふいといとそっぽ向いた。いやいや、なんだよ……。

そのままますれ違う。

だが、ここでハプニングだ！！

長い長い神のツインテールのかたつぼの先がつれ違つ俺の鼻を掠め……。

「はつ……はつ、はつくしゅ……」

盛大にくしゃみをかまして、前に体重をかけてしまつ。つまりは

。

あ、やつちまつた……。そう思つたときこはもう遅い。俺の田前にはコンクリートで作られた床が迫り……。

ガツツ
!!

- いて！

覚悟しても……痛いものは痛いな

「なにしてんのよ」

背後からそんな声が聞こえ、鼻を押さえながら振り返ると榊が手を差し伸べてやった。

「あ
?」

「やれやれと起せねどこか」

あ：お：「

「うーん、どうも『アーヴィング』が描かれてる感じがするな？」

授業中とは全く違つじやねえか。

15
h

卷之三

アニメの見すぎ……？

三
三
七

「れまだどうでも良いが……、女の子の手てあんなに小さくて柔らかいモンなんだな……。」

感觸を確かめるよ^うは揃^{そろ}んでモ^モロ^ロた手を握^つてたり
放^{ほど}したりを幾度か繰り返していようと……。

あた会いましてね？」

• ॥ ॥ ॥ ॥ ॥ ॥ ॥

決して大きさに驚いたわけではない。しかし、傍から観れば明らかにオーバーリアクションこ見えただろ？

「あははは。アーヴィング。驚かせちゃう

振り返った所に居たのは小さく笑っている純白のロングヘアの女子生徒。上腕に巻かれた『風紀委員』の布……なんでこの短期間

で、しかもさつきすれ違つたばつかの子にまた会つんだ。

「あなたはお姉ちゃんの知り合いでですか？」

「……お姉ちゃん？」

「はい。さつき、あなたを起こした女子生徒の人です」

「神の……事か？」

「あ、やっぱり知り合いでしたか。私は神観紗緋さかみみさひです。神夕緋の妹です」

ペニシリと頭を下げられる。

「あ、俺は西条一真せいじょう いつま……神と同じ学年で同じクラスだ」

「そうですか。あ、神ってお姉ちゃんのことを呼ぶなら私と区別しないくいとと思うので私のことは観紗緋と呼んでください」

「あ、分かった。俺のことは好きに呼んでくれて構わない」

「それでは一真先輩と呼ばせてもらいます！」

「おう」

「それでは、失礼しますね」

そう言つて観紗緋はぱたぱたと革靴の音を立てながら階段を上つていった。

しかしまあ、あの白い髪すげえ綺麗だな。それに夕緋の妹だろ？全然違う性格してるじゃねえか……。

夕緋も髪の毛おろせばあんな性格になるんじやないか？
はあ、もうそんな冗談はいいか。

そのまま階段を下りて、食堂に入った。

入口のそばに置いてある食券の自販機に金をいれて、オレンジジュースの食券を買つ。ちょうど、飲み終える頃には夕陽がいい感じに見えるだらう。

そう思つて俺はオレンジジュースの食券を手に受付のおばちゃんの下に歩いた。

別に俺は親の言いなりになつてゐるわけじゃない。ただ、俺の意志がそこにあるからだ。

なんて言い訳にしか聞こえないよな。やはり俺はそんなにかつっこいい人間では無いようだよ。**優子**……やっぱり俺はお前の思ひょうつな人間じゃないんだ。

わかつてくれ。

そう小さくつぶやき、俺の膝の上で寝る妹の優子の頭を撫でた。長い黒髪が撫でるたびにさらさらと動く。度々うめき声を上げながら寝返りをうつたびにソファから落ちるんじやないかとヒヤヒヤするが、今のところ落ちる気配はない。

小さな寝息を立てながら眠つている優子はこの同条院家の長女……という形でこの家に住むいわゆる養子だ。親が女の子が欲しいと思つていたが残念ながら生まれたのが俺で、そして俺を産んでから母上はすぐに他界。悲しんだ父上が出向いた先は孤児院。そこで見つけたのが優子だった。

たしかに優子は母上の面影を感じる。長い髪の毛が母上にそつくりだし、目尻がつり上がっているところがやけに母上を思い出させてくれる。まあ、俺が見た母上は写真上の話なんだけどな。

優子が来て10年。時代は大きく動いて、今や経済が大発展。多く稼いだ者が勝ち組にあがり、少ないものは負け組になる実力の資本主義。

俺ら一家も必死にその時代にしがみついている。そんな中、この同条院にひとつの中がかかる。

『大企業の娘との結婚』

結婚するのは父上ではない。俺だ。

日本の中核に位置するといつてもいい大企業からの提案がこの同条院に持ちかけられたんだ。

俺だつて、許嫁っていうのは気分がいいものではない。だが、負

け組になるのはどうしても嫌だった。

母上に……恥をかかせない……。それが俺の一番の気持ちだった。
優子はここのことに大反対している。俺にひたすら考え直すようにな
言つてくる。まだ中2の優子にはこそこそか早い話だがなにか譲れな
いものを優子も持つているんだろう。

「ん、んう……」「

小さくうめき声を上げながら、優子はゆっくりと目を開けた。俺
の方を見上げ目を数回こすったあと、また目を瞑ってしまった。よ
ほど眠たいんだろう。

「紅恋くわいんおぼっちゃん。失礼いたします」

ドアの向こうから控えめな男の声が聞こえる。俺はちょうど前方
の壁に掛けてある時計を見る。時計の針が指す時間を田にてて気づ
く。

「そりゃ……もうこんな時間か。

「入れ」

「それでは……」「

ゆっくりと扉が開き、白髪を伸ばした中年の男が頭を下げてから
入ってくる。この人は俺が生まれた時からこの同條院家に使える使
用人だ。垂れ下がった目や伸びたヒゲがとても俺を安心させてくれ
る。名前は藏川総司くらがわそうじだ。

総司はこちらに目を向けると微笑みを含んだ声で言つてきた。

「これはこれは……仲がよろしくようで」

「今日は偶然だ……優子が膝で寝てしまつたからな」

「そのまま寝かしてあげる紅恋さんもまざりではなきやつで?」

「ああ。こいつの時間は貴重だからな」

「それほど、お嬢様の事がお好きでしたか?」

「違うよ……これほど静かな時間が貴重つてことだ」

「素直ではありませんねえ」

「なにか言つたか?」

「いえいえ

最後の一言はなんて言つたか分からなかつた。まあ、どうせ俺らのことをまた言つたのだろう。

とりあえずだ。この俺の膝で寝息を立ててている優子をビリにかしないとな。しかし……もういいか……抱きかかえてベッドまで持つていこう。

俺は優子の頭を膝から持ち上げ、ソファに寝かす。その体とソファの間に手を差し込んで抱え上げる。優子の部屋まで連れて行くのが面倒だつたから俺のベッドに寝かしてやる。

「やはり、起こさないのですね」

笑いを隠しきれずにこりり総司は笑う。

「気持ちよく寝ている奴を起こすのは気分が悪いからだ」

「ほつほつほつ

また総司が小さく笑う。まったく、こいつは……。でも、俺はこんな総司が嫌いではなかつた。

「さつさと準備しろ」

「承知しました」

そう言つて自分の腕に丁寧に折りたたんだスーツをソファの前のテーブルに置いた。

「これで出席とのことです」

「白色……？」

「はい。『主人様からの要望で』

「……そうか」

俺は白色のスーツに手をかける。俺は白色というのが嫌いだ。何色にでも染まる……なにも自分を持たない空白の白が……。いつもは黒なのにどうしてこんな……。くわ……。

「んんっ……」

ベッドの上の優子が唸る。そのまま寝返りを打つてこっちに顔を向けてくる。

目は安らかに閉じられ、小さな口からは寝息が漏れている。あい

「……いつもあんな顔なら良いのにな……つと急がないとな。

さつさと着替え、総司が手に持っていたカバンを受け取る。

「それじゃあ、行くか

「かしこまりました」

俺は玄関に向かつて歩き出す。俺が出る前に総司が部屋を出て扉の前で俺が出るのを待機してる。

俺は部屋を出る寸前に振り向き……

「行つてくる」

そう静かに言った。

誰に対しても言つたかは聞かないで欲しい……。

To Be Continued

神の妹 紅恋の妹（後書き）

ちょっと飛びすぎてますかね……。
すいません。

なんだかんだで…… あいつの笑顔が……

食堂でオレンジジュースを飲む俺をきつと食堂のおばちゃんは異様な風景として見てるんだろうな……。

そう思いながら360ミリリットルのコップの3分の1まで減ったオレンジジュースの片手に周りを見渡した。学年全員がここに来ても入るような大きな食堂にぽつんと一人だけ座っている俺。明らかに寂しい人だ。

ああ……泣けてくるね。決して友達がいないとかそんなんじゃないんだからな。そこだけは勘違いしないでほしい！
つて何一人で弁解してるんだろうな。

そう一人で自分につつこみ、窓から外を見る。外にはこの高台の近くにある松林が見える。そういうえば、あそこで昔よく遊んだなあ……ふと、視線を上に上げる。そこには真っ赤に染まつた空が……。

夕焼けだ！？

「やべ……」

残りのオレンジジュースを口の中に流し込み、食堂の『お残しはゆるしまくん』とかかれた札が掛けられている厨房と食堂をつなぐ戸棚にコップを置く。

そのままダッシュで田の前の北校舎西階段を駆け上がる。夕焼けとは一瞬の奇跡であり、それを逃せばもう見ることができない一度きりの奇跡なんだ！ 遅れるわけにはいかん！！

三階に上がる最後の一級に足を引っ掛け、こけそうになりながら

も教室に走り込もうと扉に手をかけると……。

ガララララ

俺が開けるよりも早く扉が開いた。まで、この状態で誰かに出てこられたら……。案の定、開けられた扉の向こうには純白の髪の毛を伸ばした女子生徒が……。

観紗緋　！？

急激なブレーキをかけるオレだが、これほど近距離な観紗緋をよけることができるはずなく俺の体は宙に投げ出される……って、え？

ドガ、ガダダダ！！

宙を舞つた俺は教室の前から一一番目、入口方面から一列目の席に体ごと突っ込んだ。派手な音を鳴らしながら俺に襲いかかってくるように倒れる机に俺は押しつぶされる。

「いって！　ああ～～～」

うめき声しか出せないのが現状だ。いやしかし、なんでこうなつたんだよ……。

観紗緋にぶつかりそうになつて、ブレーキかけたけど間に合わなくて、ああ……当たる！　って覚悟した時にはこの様だ。いみわからん。

「大丈夫ですか！？」

「ああ……やつちやつたわね」

「観紗緋い……？」

うつぶせに倒れる俺の上からのしかかる机を観紗緋が持ち上げどかしてくれた。いかん……腰が……。

「うう……。腰を抑えながらゆっくり立ち上がる。

「なにが……どうなつたんだ……？」

「すいません！　私のせいです！」

「までまで……事情を話してくれ

倒れた椅子を立てた俺はその椅子に腰を下ろす。

「私……護身術で色々、武道を学んでまして……それでついつい飛

び込んでくる一真先輩を反射で投げ飛ばしてしまつて……」

すごいなあ……観紗緋の1・5倍ぐらいの体重の俺をいとも簡単に入口からこの距離まで飛ばすなんて……一体、その細身の体のどこにそんな力が……。

「あんた、こいつの知り合いなの？」

俺が観紗緋を見ている視界の端から純白のツインテールを揺らしながら歩いてくる榎が観紗緋に問いかけた。

つか、お前いたんだな。

「え？ うん。さっき階段の前であつたんだ」

「へえ、そう。こんな奴と関わっちゃダメよ観紗緋」

「人を悪い虫みたいに言つくな」

いちいち感に触る言い方しやがるな」こいつは……！

「あんた害虫そのものじやない」

「シラつとそんなこと言つくなよ……！」

なんなんだよこいつはー？ 俺の何を知つて害虫呼ばわりしやがるんだ。

「可愛い子だからって気安く話しかけるなんて害虫じやない！ あの高台でも私に話しかけてきたし……！」

「お前……暗に可愛いって自慢してるのかよ？」

軽い挑発を飛ばしてやる。

「…………うるさい……死ね！」

「え！？ ちよ……！ 待てって！ う！」……？

最後の一聲は榎が榎のキックを顔に受けたから漏れたんだと思つてくれ。お前も護身術習つてんのか？ というかむづちやいてえ……。

それと……水玉……。

「死ねばいいのよ！」

そう言い残して榎は教室を出て行つた。

口で勝てないからって暴力を振るうとは……くそ……なんか負け惜しみみたいになつてる……！

「ほんとにすいません」

観紗緋はぺこりと頭を下げて、しちりに手を差し伸べてきた。観紗緋……お前は姉貴なんかと違つて出来た女の子だよ。姉妹とは思えないほど違う性格よなあ。

あ、でも榊も階段では手を差し伸べてくれたつけ？

「すまん」

手を握り、起き上がる。

椅子をもとに戻して大きく伸びをする。観紗緋はそんな俺を見てクスクス笑つた。

「なんだよ？」

「別になんでもありませんよ。それでは失礼しますね」

もう一度、ペコリと頭を下げてから観紗緋は教室を出て行つた。
ああ……もう……なんかドッと疲れたよ。そう思いながら窓の外を仰ぐと……真っ赤に染まつたそ　そう！！　夕焼けだ！！

腰に走る鈍痛を我慢しながらカバンを自分の机から取り、ダッシュで教室を出る。西階段を高速で駆けおり一階の廊下を走り抜ける。校門の前で榊たちに会つたが「じゃあな」の一言を残して俺は走り去つた。

いかん……腰は痛いし、カバンに入つている教科書たちが俺の足にダメージを与えてくる。この5キロ弱の荷物を持ってこの急な坂道を登るのはちと至難の業じなんわざだ。

しかし、俺はこの先にある奇跡の夕焼けを見るために戦うしかないのだ。とかなんとか言つてゼエゼエと息を切らしちまつてる。いやしかしこの斜面急すぎるだろ！？　はあ……。

まあ、なんとか登り切り、高台の芝生の上に座り込む。

「ふう～」

ついつい出てしまう溜息。いや、ほんとに疲れたんだって！！
でも、この夕焼けを見てるとなにもかも飛んでいくな……。
このまま眠つてしまいそうだ……そういうやあ……今はなんか熱くな

いな……心地よい暖かさだぜ。

「あんた……」

背後から聞こえた声に振り向くとそこには榎が立っていた。

夕焼けの光に反射した純白のツインテールはこれで違う輝きを放つていて。

「榎か……」

「夕緋って呼んでいいわ」

そう言いながら俺の隣に腰を下ろす。

夕焼けを眺める夕緋の姿は凜々しくも見えたりして……見惚れてしまつほどだった。

いつも見るとほんつとに美人よな……びっくりするぐらい。それに夕焼けという接点がこの美少女転校生とあつたとは驚きだ。しかしあま、この俺と夕緋のツーショットを誰かに見られたら色々と問題になりそうよなあ。

「榎……夕緋はこの場所知つてたんだな」

「昨日知つたんだけどね」

そういうえば、昨日ここにきて二年と喧嘩してたんだっけ……。なんで喧嘩してたんだうな……。その疑問を口にじょうとした瞬間、夕緋が口を開いた。

「きれいね……」

「あ……？」

「そう言えば、まだあんたの名前聞いてなかつたわ」

「西条一真だ」

「あ……？」

「変わつた苗字ね」

「お前もそこそこな」

なんだかんだで話が噛み合つてゐる気がする。いつこうこうつならまだ可愛いと思えるんだがな……。わざきの時とか授業中とかどうだよ……。あ、そうだ……。

「なんでお前、猫がぶつてるんだよ」

「はい？」

「授業中……むちやくちやかぶつてんじやねえか」

「あれは……私の素^すよ」

「じゃあ、今はなんだよ」

「……素^すよ」

「どないやねん」

そんな話を夕焼けが沈むまで俺たちはやり続けた……。

揺れる車内の中、俺はそつと外を見た。そびえ立つビル群。走りゆく車。歩道をあるく数多の人。こんな都会では珍しくない光景だ。この日本の都市、東京都は今は経済の中心地。ここを無くしては日本は成り立たない！ そう言つても過言ではない。だが、もう少しで俺はこの都市をしばらく離れないといけない。それはどうしても笑えない話のせいだ……だ。

最近ずっと父上と話す内容はこのことだ。もう、うんざりだ。

優子は優子でうるさいし、俺だってわかつてるんだ。そんなにしつこく言われたくな。

白色のステッジが目に入り、また気分が悪くなる。

血ずと出てくるため息を俺はこらえることなく出す。あつと帰ればまた優子に行くなどとかどうとか言つてくるのだから。憂鬱だな……。

「ほつちやま。いつもよつため息が一層多いですな……どつかなされましたか？」

総司が運転席から一いつひに振り向いて話しかけてくる。前方をみるとどひつやひ赤信号へこへ、その時間つぶし……と言つたところか。

「なんでもない」

「ほほほ。そりおつしゃぬとあは大抵、なにかある時ですか？」
やはり総司に勝てないな……。まつたくこいつは……。

「……帰つたらまた優子に言われるんじやないかと思つてな
「喧嘩するほど仲がいいと言つではありますか」

「喧嘩しない……」

「ほう？ では今日のよつな仲の良いスキンシップですか？」
「そんなわけないだろー。それに今日は別にあいつと遊んでいた訳

じゃない」

「ほほほ」

せつ言つてアクセルを踏む総司。そこから総司がしゃべることとなかった。

俺だつて前の頃のよつに優子と仲良くしたいわ……。あいつの笑顔をみたいさ……。

……そういえば……明後日は優子の誕生日だつたな……。父上はご帰宅なさるのだらうか……。せつと帰つてこなかつたら優子のやつ……悲しむだらうな……。

「ふん……」

ついつい鼻で笑つてしまつた。

俺はどれだけ妹のことが好きなんだらうな……。別にそんなつもりはないのに……。

「総司……」

「はい？ なんでしょう？」

「帰り道で、どこか良い店はないか？」

「……どのよつな……？」

「中学生の女子が喜ぶよつな物が売つてある店だ」

「……ほつ。分かりました。ちよつとすぐそばにありますので、向いましょう」

「頼む」

でも、やっぱり俺は……。

あいつの笑顔が見たいんだろう……。

To Be Continued

なんだかんだで…… あいつの笑顔が……（後書き）

ちょっと無理やり感がありますね。
じつはこの具合が調節できなくて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4004z/>

夕焼けが見える高台で出会った少女は

2011年12月26日21時02分発行